



購読申込先

NOSAI 宮城
仙台市青葉区上杉
1丁目8番10号
〒980-0011
電話022(225)6701
https://www.nosaimiyagi.or.jp

初春



東松島市 アグリードなるせ

大規模農業に最新農機

【東松島市】東松島市の「有限会社アグリードなるせ」(2006年設立、安部俊郎代表取締役62歳)は、100畝規模で水稲、大豆、小麦、大麦の2年3作を中心とした土地利用型農業に、スマート農業技術を導入している。

同社は、国が実施する「スマート農業実証プロジェクト」に2019年から参加。生産から出荷までの一貫作業体系にスマート農業機械を活用し、生産コストの低減と、収量・品質の向上を図っている。

受託面積の増加をカバー

GPS(衛星利用測位システム)やセンサーを使って情報を集め、ロボット農機など先端技術と組み合わせ、作業を省力化し、高品質・低コストな生産を図るスマート農業が注目されている。担い手不足が深刻化する地域農業を次代につなぐと、新たな農業の形に取り組む経営者を紹介する。



自動運転アシスト機能搭載のコンバイン。作業者がハンドルを握らなくても作業ルートに沿って走行する

農業新時代

先端技術でつなぐ営農

色麻町 小松牧場

牛舎に監視カメラ



カメラを指さす小松さん。つなぎ牛舎やフリーストール牛舎など各所にカメラを設置

負担減らして働きやすく

【色麻町】「作業の簡素化をして、肉体的にも精神的にも、従業員の負担を減らす環境づくりに努めた」と話す色麻町の「有限会社小松牧場」社長の小松克範さん(52)。「人材不足」とし、2014年、個



「牧場の周囲や設備を一目で観察できる。トラブルに対処しやすい」と話す小松さん

体や牛舎内の様子を撮影するカメラを設置した。自動録画し、映像はタブレット端末で見ることが出来る。同牧場では、成乳牛200頭と育成乳牛25頭を小松さんと従業員6人で飼養。牧草13畝を作付けする。カメラは主に牛の分娩を把握するため活用し、小松さんは出先でも個体の様子を把握でき、従業員に指示を出せる。

分娩の対応が万全に

「以前は、分娩を知らせるために1人が待機していた。冬の牛舎はすごく冷え込むので負担が大きかったが、今では、待機していた余分な時間を休憩や他の作業に充てられ、効率的」と小松さんは話す。

暗視機能で見守り牛舎の他、餌場や堆肥舎など牧場内にはカメラ9台を設置。360度回転やズームが可能で、録音する他、暗視機能もある。牛に負担を掛けずに見守りができ、防犯にも役立つ。

気仙沼市 シーサイドファーム波路上



「昨年はデータがなす手探りだったが、今年はデータを生かし作付けは良好」と鈴木さん(右)と菅原さん

イチゴの高設養液栽培 自動制御装置を活用

【気仙沼市】東日本大震災で多くの圃場や、農業生産施設が壊滅的な被害に遭った気仙沼市の階上地区。階上地区のイチゴ栽培は昭和40年代から始まり、震災以前は土耕栽培を主流に、20戸ほどの生産者がいたが、10戸ほどまで減少したという。

同地区の農業法人「シーサイドファーム波路上株式会社(佐藤信行代表取締役・68歳)」は、イチゴ栽培の再開を目指し、2018年に大型ハウスを新設。自動環境制御装置を活用しながら52坪でイチゴ品種「とちおとめ」「もっしゅ」を育て、データを蓄積し、栽培環境を設

データの蓄積が強み

「高設も、装置を使った栽培も一からの挑戦だが、土耕に劣らない食味を追求していきたい。人とイチゴ、両方の復興を目指す」と佐藤代表は意気込む。

制御装置はあらかじめ環境情報を設定し、各種データ(ハウス内の温度、二酸化炭素濃度、外気温、液肥のpH濃度、地温など)を測定し、天窓の開閉や養液ポンプの排出量の調整などを行う。

事務所を設置したコンピユーター(基地局)でデータを管理し、栽培環境を設



雷などの天災に備えてデータのバックアップは必須だという



安部代表(前列中央)と社員の皆さん(写真提供:アグリードなるせ)

また、「最新技術の導入は、若い人たちが農業に興味を持つきっかけになると思う」と期待する。

「農業は栽培技術の継承が大変だが、『データ』という確かな記録があれば楽に引き継いでいけるはず」と鈴木さんは将来を見据える。(浅野ゆ)